

9月3日 国政輝郎、江原猪知郎、水礼市藏、近藤義郎、神原英朗等は、はじめてこの地を訪れ道路断面にあらわれていた黒ぼこの落ちこみを、弥生式竪穴住居址と確認した。更に道路の東西の丘陵上にて表面調査を行い、若干の弥生式土器片及び扁平片刃石斧破片を探集し、丘陵の広い範囲が弥生式遺跡であることを知つた。

10月7日 近藤、神原、山田英輔、河本清、坪井宏祐、河本昌広、高木美子等は、丘陵西地区について、平板測量を行い、同時に表面調査も行つた。

11月21日 発掘開始。道路に断面を見せているA住居址、B住居址の表土を剥ぐ作業を行う。それぞれの推定住居範囲よりも広く耕土していった。若干の弥生式土器小破片が表土中に認められた。国政、水礼、白石、神原、岡本明郎、今井亮、河本昌広、近藤等。

11月22日 A住居址の発掘を続ける。上方から順次に才1層(表層)才2層才3層才4層と耕土を続けていった。才4層の作業中、南よりの地点から黒土の中に炭化木質を含む赤く焼けた部分が発見されたほか、才3層才4層の焼付近で、炭化した木材を数ヶ所で発見した。これらの発見によつて、私達はA住居が火災にあつたものかも知れないと考えた。土器はすべて小破片で、各層から発見されたが、才3層才4層が多く、才2才1層は少い。B住居址は、附近一帯の表土を除いて観察した結果、大半が道路工事によって除去され、その極く一部が残つているのにすぎないことが判明した。断面が道路からよく認められるので、見学用として残しておくことにし、その地点から西に向けて市約1mのCトレンチをほりはじめた。

11月23日 Cトレンチを更に延長したが、住居址その他の遺構の発見に至らなかつた。土器も小破片の微々たる量であつた。Cトレンチに対して直角に、Dトレンチを掘つて、住居址Eを見出し、更にCトレンチをこえたDの延長トレンチFにおいて、G住居址を発見した。E住居址は表土の排除を行い、その円形プランの大体を露呈させた。

A住居址では、才5層として床面までの耕土を続ける。炭化した木質が至るところに発見されたほか、ガラス製小玉が床上約15cmの個所から、柳葉形の石器が北壁に近く床面に接する辺りから見出された。土器破片は数は少いが、炭化木材の周囲からもその下からも見出されている。

11月24日 A住居址では昨日に引き続き、才5層を床面まで剥す作業を続ける。炭化木材が至る所から夥しく重なり合つて発見され、それを町壁に露呈していくため、仲々捗らない。屋根を葺いたカヤと考えられる炭化した木も発見された。黒土に混じつて赤褐色の土が折つてある点も注意され、それをどう考えるかについて討議された。E住居址は床面真上までの耕土を行つた。出土する土器破片は何れも細片のみで、その量も著しく少いことが注意された。Cトレンチの南側にHトレンチを掘つたが、極く微量の土器片が見出されたのみであつた。

11月25日 A住居址については、炭化木材の露呈作業を続ける。竪穴内の周溝の底及び溝に接する壁にひつづつて弥生式土器の破片が発見された。E住居址は床面の調査に移り、約半分程の床面及び周溝を露呈した。土器は著しく微量で、僅かに南側で数片が見出されたのみである。また

竪穴中央にはほぼ円形の穴が発見されたが、その周間に低い土手状の隆起を伴つてゐることが確認された。G住居址は本日からかかつたが、表土を剥離した結果、圓丸の小形住居址であることがほぼ推定された。南への傾斜地に作られているため、住居址南側では床面が著しく浅く、表土を剥ぐと、まるで床面が現われる。竪穴内南西の黒土に把手付の土器一個体分の破片がかたまつて発見された。

11月26日 A住居址の炭化木材露呈を続ける。南側の部分は炭化木材を殆ど見ないことが判明した。土器片は床上において、脆弱な細片が若干見出された。いづれも二次的な火をうけて脆弱になつたように思われ、この住居址が火災をうけたものであることが、殆ど確実と推定された。E住居址は、床面の全体を発掘し、炉址と見しい赤褐色で固い部分を二ヶ所及び、竪穴五を発見した。中央の穴も排水されその全貌が露呈されたが、曾つて調査された勝田郡奈義町御崎野遺跡及び同野田遺跡のそれと異なるところはなく、明らかに柱穴とは区別される植耕のものである。G住居址はその窓を追いながら同時に床面の調査にかかつたが、東壁の南端附近で、巾約60~70cmで段状をなし、入口かと考えられる構造を発見した。また北壁の東側に近い部分に、河原石の一群があるものは床に接し、あるものは床より約10数cm高く発見された。床面は一般に凹凸がはげしいので、慎重を期してその全面的な露呈を明日に延期した。

11月27日 A住居址は引続いて炭化木材の露呈を行う。西壁の一部に接して、鉄器1ヶを発見したほか、周溝中に砥石1ヶを見出した。一般に南方では炭化木材が著しく少くなつてゐることが判明した。この日、附近の大工さんに来て頂き炭化木材についての意見をきいたところ、今露呈されている木は、榎木、栗、桑木であつて、柱の材は残っていないだろうとのことであつた。E住居址ではその外周一帯の調査を進めたが、東側に浅い小円穴があつたほか、何等の遺構も認められない。G住居址では床面の調査を進め、中央にE住居址に見たと同様の穴を発見、Eと同様に周間に低い土手状の隆起をもつてゐる。

11月28日 雨のため、午前中A住居址の鉄製品を実測写真の上取り上げたのみで休む。

11月29日 A住居址では床面の炭化木材のあらかじめの分布状態がつかめるところまでこぎつけた。ほぼ中央にある柱と考へられた太い丸太材はその下から横木と考えられる若干のはぼ直行する木材の発見によつて、それが合掌の木材であろうとする可能性を強めた。更に南側の溝において、木材の落ちこみを取除いて拂土したところ、北側の溝に較べて著しく浅くなつてゐることが注意され、周溝の地点による深浅が判明した。なお昨日発見された砥石が昨日の休み中に失していることに気がついた。E住居址は一昨日に引きつき外周の調査を行つた。G住居址では東西北の壁はほぼ追求できたが、傾斜地に作られている關係からか、南壁は全く認められず、またそればかりでなく、東西から追跡した周溝も、はつきりと認めることが出来なかつた。中央の有場の穴の東西に各一ヶの柱穴を発見した。G住居址は二本で主柱が構成されていたと考えてよい。

11月30日 A住居址では炭化木材の露呈を続行する。G住居址の南の周溝の追求を続けたが、僅

かにそれらしい浅い凹みの連続を発見した。東側の入口かと推定された段の部分の調査も行つたが、入口と考えてよいと思われた。

12月1日 全員してA住居址の床面及び炭化木材の露呈にかかる。柱穴が4ヶ所において発見され、その内3穴を発掘した。南側の1穴の深部は袋穴状となつてゐるようであり、またその部において水がたまる。4ヶの柱穴はほぼ等間隔に並び現存部の柱穴のすべてであろうと推定した。

12月2日 夜の内か、今朝か、A住居址の中に何人かが不注意に入つたらしく、3、4ヶ所において、露呈した木材が崩れたり潰れたりしていたが、主要な部分は保存が保たれていたので一安心。全体を清掃した後、割り付けを行い、実測を開始する。E住居址の外周の調査では、壁外約30cm～40cmの個所に、径約5cmほどの小孔が、やや不規則に10数ヶ所発見されたが、その性質についても、またそれが果して当時の何等かの遺構であるか、それとも単なる自然樹の根の痕跡であるかについても、判然としなかつたので、更に明日、範囲を一層拡大して調査することにした。

12月3日 A住居址の炭化木材の配列についての実測を進める一方、Eの外周調査を続行する。黒土を全面的に剥いでいったが、その一部において、鉄製品を発見した。しかしこの鉄製品はどうやら後世のものらしい。

12月4日 A住居址の実測を続ける一方、E住居址の外周調査を行う。南側から東側にかけて壁から約2.7m～3.0mのあたりに、柱穴?の如きもの2、3を発見する。

12月5日 A住居址の炭化木材及び遺物の配置についての第一次の実測を終了し、遺物……主として上器であるが……の取上げを行う。土器類は床面、木材の上、赤褐色にやけた黒土の上、溝底、壁に附着等々に発見されているが、何れも小破片で、焼しまりが弱く、脆い質である。当初から気づかれていた赤褐色にやけた黒土は、火災中にそれを消火するため投人されたものであつたかも知れないと考えるようになつた。E住居址外周の調査は本日も続けられ、小さな落ち込みの穴及び不規則な浅い溝状のものを発見したが、その性格をはつきりさせることはできなかつた。更にA住居址との間の表土を剥ぐ作業をはじめ、その一部にやはり、小さい落ち込み穴を発見した。

12月6日 A住居址の西北部外周の表土を剥ぎ、調査を進め、若干の黒土の小さな落ち込みを発見した。また壁から1m～2mはなれた北側の個所から、5、6ヶの拳大乃至それ以下の火をうけたと考えられる小石を見出したほか、西側において、金クソのかけらを発見した。A住居址内では才2柱穴(北から才2番目の意味)を掘つた際、穴壁に附着して炭化木質が検出された。

12月7日 渋谷泰彦によつて、木材の個々及びその配列が詳しく検討された。中央の最も太い木材は、中央柱穴から西北に向つて倒れた中心柱であることが判明したほか、各柱穴についてそれぞれその柱材が指摘された。周囲の柱は、平均6寸位のデシカク材を、サスには約2寸位のデシカク材を使用していたことを推定された。午後3時すぎに、平板をすえて、A、B、E、G各住

居址の相互関係を測定した。

12月8日 G住居址の清掃を行い統一して測量を行う。その際注意されたのであるが、Gの東側の溝底に全くそ状のものが自然層の状況で存在した。前にG住居址の床面や黒土中に発見された『金くそ』と同性質のものである。そのため道路の断面を詳しく観察したところ、同じ金くそ状のものが、自然層（黒土より数10cm下の赤土）の中に線状に走っているのが認められた。その結果、この全くそ状のものは、自然に鉄分の凝集した高師小僧の一種であろうと推定された。A住居址では、各木材の長さと太さを計測したほか、外周の削土を行つた。

12月9日 A、E、G各住居址の断面図を画いた。その際G住居址の北側の河原石の一帯を取り上げたが、その一部又は大部分は火にあたつているようであつた。Aでは依然として、火をいた場所が発見されていない。Eの床面が黄色味を帯びているのに引きかえて、Aの床面はむしろ橙色乃至赤褐色を帯びていることが、発見をより困難にしていると考えられた。

12月10日 E住居址及びその外周の測量を行う。その際住居址内の北側において、周溝が二手に分れ、一つは床面の方に伸びてきていることを発見した。しかしそれは途中で消えてしまつて、向いの壁下の溝には続かない。一方、北壁下の溝は他の部分に比べて著しく浅く、部分的には全く又は殆ど凹みをなしていない点が注意され、果してこの周溝が、排水溝であつたかどうかを怪しませた。なおついでに述べれば、E住居址は、耕作者の都合によつて、その西側の一部は未発掘のまま残された。その後、梯子を組んで、俯瞰撮影を行つた。

12月11日 A住居址の木材配列の写真をとり、露呈不充分な点が残つてることに気づき、更に耕土を続けることにした。

12月12日 A住居址外周の調査及び内部の露呈不充分な部分の作業を続ける。結局A及びE住居址の外周に幾つかの大小の穴が発見されたが、その配列及び大小深浅及び形態は全く規則的でなく、何等かの住居外装設備又は他の遺構を考える上の確定的な手がかりとなり得ないことが考えられた。

12月13日 A住居址の木材の取り上げをはじめる。主要な材はそのままにして、茅及び断片的な材を除去していくが、その下側から更に別な木材及び茅が発見され、作業は困難を極めた。茅は中央辺より北側において、ほぼ全面的に見出されたが、最も厚く残つてゐるところで、約3cm～5cm程度で、一般的にはもつと薄く、一重である場合が多かつた。

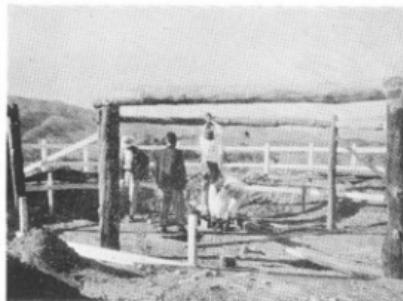
12月14日 A住居址について、茅及び断片的な木材を取り除き、基幹的な材の全貌を露呈させる作業を続ける。茅や断片を取り上げるにつれて、再び実測の必要を感じさせるほどの新しい材が現われた。

12月15日 A住居址の新らな部分についての木材の露呈とその一つ一つについての検討を行つた結果、母屋の横木がその倒れた方向と共に確かめられ、更に中央柱が2本であつたかも知れないという推定及びそれに基いて竪穴のプランが橿円形であつたかも知れないという推定が、中央

の太い柱材の北側に発見された太目の材の存在によって、提出された。

12月16日～19日 A住居址の新らたに露呈された材について実測を続行する一方、主要な材の取り上げを行い、19日に終了した。

なお1954年のA住居址復原及び歴史教材公開化に伴う作業の経過については省略する。



柱を立て、梁をのせる



母屋をぐむ



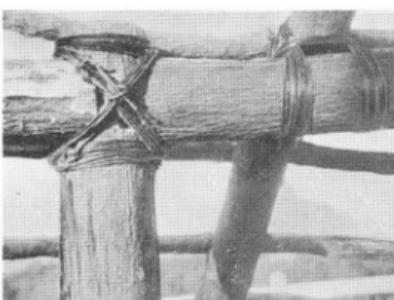
屋根を葺く



かやをそろえる



屋根を葺く



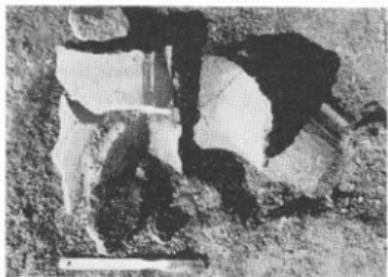
材の緊縛



道路断面に露わされたA住居址



G住居址堆積土中の弥生土器(13回版参照)



Mピット上部発見の弥生土器



A住居址の発掘



E住居址の発掘



A住居址の発掘

附 錄

津山市山北一丁田遺跡

植月壯介

近藤義郎

## 津山市山北一丁田遺跡

### 1 まえがき

美作地方に於て縄文文化に伴う遺物が発見された地は現在の處5～6ヶ所しか知られておらず、その地から出土している遺物の量も極めて少く、何れもまだ遺跡として捉えられるに至っていない。又、弥生文化前期に属すると認められる遺物の出土地も僅か2～3ヶ所に限られているという様な淋しい状態である。このことは未だ発見されていないというよりも遺跡の絶対数が少ないという点に根本的な原因が存するものと考えられる。ところが弥生中期に入ると偶然遺跡の数は増大し、現在の集落からなるか隔つた思いもよらない山間部においてすら私達は遺跡を発見するのである。

本遺跡は美作におけるそうした数少い前期の遺跡の一つとして極めて注目すべき遺跡であるので、今日迄筆者等が折にふれ眺めて來た事項の若干をここに報告してみたいと思う。

### 2 遺跡の立地条件

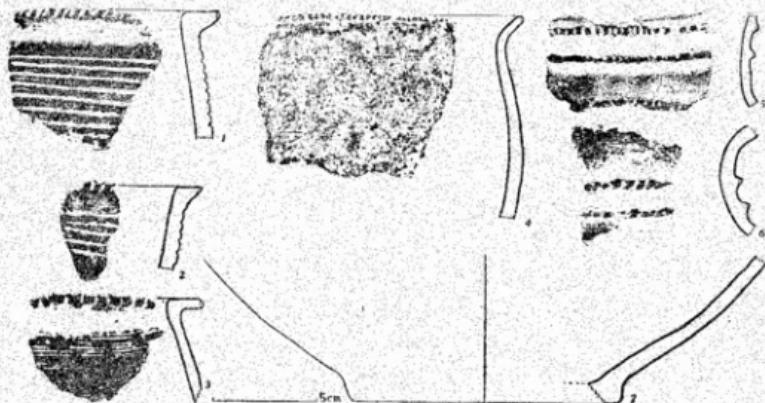
本遺跡は岡鉄津山駅北方約2秆の地点に位し、津山市山北字一丁田及び溝の内に跨っている。地理調査所発行の5万分の1地形図『津山東部』に依れば、衆楽公園を東西に辿つて地図の左端に当る。此の地は昔しくも西田条郷遺跡の一部であるのみらず現在、岡山県立農業試験場津山分場の一部でもある。

中畠山脈の一枝脈である神楽尾山系は幾多の小支脈に分かれ、南東に伸びてオ三紀層に属する丘陵性の台地に続いており、その台地は土壤浸蝕の程度が進んだ段丘となつて津山市街地北方の上河原田園と称せられる平坦地に没している。此の平坦地は、西は小原、總社、山北の各台地、南は椿高下の台地及びそれに続く鶴山城跡の丘、東は沼、北は大田の丘陵に囲まれて南北に稍々細長い小盆地を形成している。吉井川の支流である宮川は此の盆地の東寄りを南下し、丹後山と鶴山城址の間を賀見市街地南方に於て吉井川に合流している。

此の盆地は比較的近代に至るまで低湿地であった形跡を止め、今日も尚衆樂公園附近には畠田が存在し、地元の古者の話によれば大正初年迄は可なり広範囲に亘つて一毛作田であった由である。遺跡は此の平坦地のはば西南端に在つて丘との傾斜変換線上に位し一部は遺田によつて埋められている。標高は海拔は110米前後で西及び南は高地であり東に向つて僅かに傾斜を保つている。

### 3 遺物発見の動機

筆者の一人、植月が岡山県立農業試験場津山分場に勤務する様になつた1948年此のあたりの農場一帯におびただしいサヌカイトの破片の撒布しているのを知り、注意していたところ、多数の石器と土器、蛤貝石斧等を発見することができた。1951年6月に至つて例々試験場の附属建物で



第26図 津山市山北一丁田遺跡発見前期弥生土器

Fig. 26

ある堆肥舎西側の巾約2米の用水路に沿つた狭道の拡張工事が行われ、堆肥舎北側の空地を1メートルばかり掘り下げて都土が行われたが、此の時各種遺物が掘り出されたのである。

#### 4 遺物の出土状況

1939年、此の地に試験場が設置されるまで此のあたりは長らく水田であつたと云われており、堆肥舎の敷地は第三紀層頁岩を以て約20cm地上げが行われていた。最初遺物が発見された地点附近は水田であつた時代以降表土の移動が行われた形跡は認められず、雜草に覆われた平坦な空地であつた。

A地点における土層断面の形態は、表層部に施粧を含む壤土が約15cmあり疊の含有量極めて少なく、土壌中の砂は微砂乃至細砂が主体をなしており一見して沖積土であると認められた。次にガニ層に黄色の鍾乳層があり、更にその下層は約1米の深さまで緻密な黒色酸性腐殖土（P.H. 5.2~5.4）の均一な土層があつたが、此の層の厚さとそれ以下の状態は確めていない。ところが約3坪の広さに亘つて上記鍾乳層附近に掌火から蜜柑木の円株を數箇みた層が現われ揮団で示した1.2.3.6.7の土器破片を此の層に於て発見したので、或は砾石住居址ではないかとの推定をいたが、詳細に調査した結果、若干の須恵器及び弥生式中期と認められる土器破片が混在していたので、此の推定は保留することとした。これと前後して稍西寄りの黒土層から第27図の上層一個体の破片を採集することが出来た。其後1957年1月、偶然A地点から用水路を隔てて約10米西に当る民有地のB地点に於て、柿樹に輪状施肥を行つた際出土したものと想像される第26図4の上器一個体の破片が黒土と共に掘り出されて捨てられているものを採集する機会を得た。

#### 5 遺物

上記A地点に於て発見した遺物は種類が多く、此の附近で採集した石器類も少くないが、それ

等がすべて、ここで問題として取り上げようとしている弥生文化前期に所属するものであるかどうかは信に断定を下し得ないので、今後の研究に待つこととし、遺物の記述を前期に所属すると考えられる土器類に限定する。

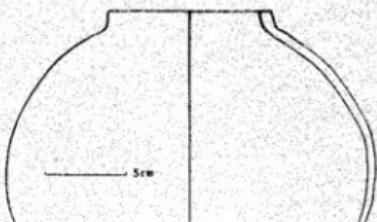
前期弥生土器と考えられる上器は、総計十数片で、8～9ヶ体に過ぎず、また全形を復原しうるものは全く存しない。しかし大よそ

の形態の特徴は観取できるので、以下にその大要を記録する(オ26図)。

壺形土器(1・3・4) 脇部がややふくらみを見せ、口縁が僅かに外反する壺形土器が、4ヶ体を占めている。何れも外反した口縁端に、器体に対して垂直又は斜めに、刻み目がつけられている。この刻み目はオ26図(1)・(3)においては太目で荒く、(4)においては細くこまかい。口縁の外反の状態も個体によつて差異を示し、ゆるく「く」の字状に外反するもの(4)、ほぼ直角に近く屈折し上縁が平坦となつてゐるもの(1・3)などがある。口縁直下の体上部に、数条乃至10数条の沈線がつけられているのが3片、その部が無文であるもの(4)が一片存した。前者の3片の内2片が籠槌沈線であるのに対して、他の1片(3)は櫛描平行沈線の手法を探つてゐる。器壁の厚さはまちまちで、約6cm(3)～約9cm(1)を測る。大きさ高さは計算困難であるが、やや大型の破片である(4)については、そのガーヴから口径17.5cmを算出した。何れも胎土は粗く石英粒を多く含み、焼成度は低いようで、多く黒褐色～黒灰色(4)のみは褐色)を呈している。

鉢形土器(2) 壺形土器と一見同様な形態をもち、その用途もほぼ同じと考えられるが、脇部が殆どふくらみを持たずに底部に移行する形態を通常に從つて鉢形土器とすれば、(2)がそれに相当する。口縁がやや外反し、その上縁は平坦、端部に刻み目をつけ、体上部に籠槌沈線5条が施されていること、壺形土器と同様である。胎土、焼成、色調も壺形(1)・(3)とほぼ同様。

壺形土器(5・6・7・8) 頸部がはつきりと作り出され、從つて脇部が丸くふくらみをもつ壺形土器の破片が2ヶ見出されている。共に頸部の破片であるが、別個体と考えてよい。何れも2条の刻み目をもつ凸帯がつけられている。(5)はそのカーブから計測して、最少内径約9.4cm、外面は黄褐色、内面は灰色を呈し、甚しく風化磨耗している。(6)は口縁端を欠く頸部破片で、最小内径約9.0cm、外面は灰褐色、内面は黒灰色を呈している。壺形土器と考えられる他の2ヶは、底部破片(7)及び無頸壺破片(オ2図8)である。(7)は底径約13cmを測り、脇部の丸いふくらみを示すゆるいカーブが認められる。器面には籠磨きの痕が見出され、砂粒の混入は少い。色調は褐色で、黒斑を若干もつてゐる。(8)は口縁上面は平坦で、口径約8.2cm前後



オ27図 津山市山北一丁堀発見弥生上器8

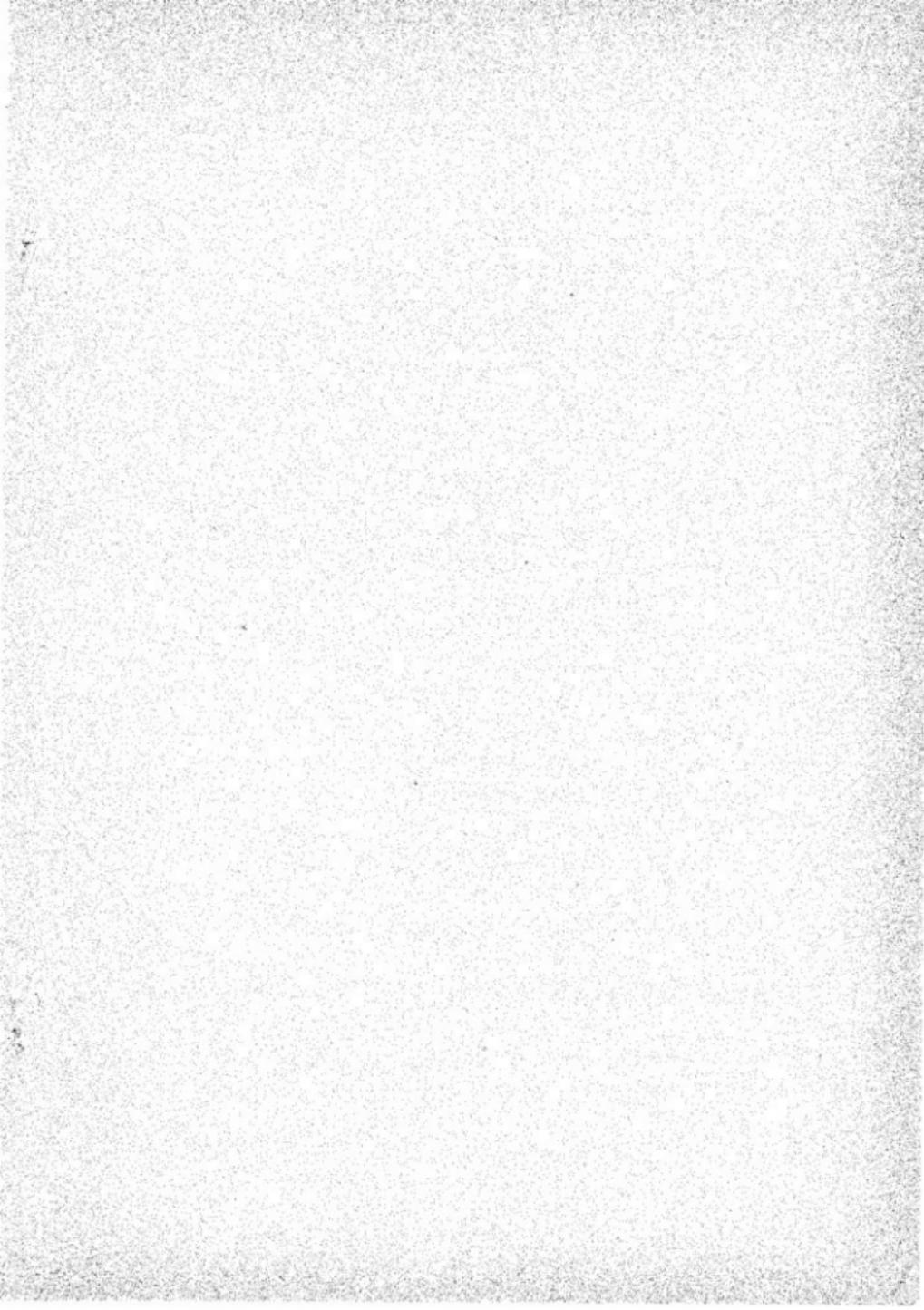
、短い頸部は短円錐状を呈し、下部に向つて僅かに張りながら肩部に接している。肩部は円錐状のふくらみをもち、その最大内径約2・15cmを測る。底部に向つて急にすぼんでいるが、下部の唇形は不明である。器底において石英粒の含量比較的少く、内面には全面に刷毛目が見られるが、外面は無文、灰白色を呈し、胴下半部は黒色である。ただこの土器を前期弥生土器と考えてよいかどうかについては筆者の中にも意見が分れている。

個々の上器片についての記載は以上であるが、全体としての形態的な諸特徴は、岡山県内の標準的な遺跡でいえば、邑久郡邑久町尾張門田貝塚の川七品にかなり共通している。壺形土器頸部の形や刻み目凸帯の手法、壺形土器の口縁部の形態、同じく柳描平行沈線文の存在などは、前期弥生土器と広く呼称される中で後出的なもの、つまり前期の後半とでもいうべきものの特色を示している。これらの点はその後中期弥生式土器の形態の中に引きがれていくわけである。

### 6 遺跡についての考察

これ等の土器が出土した地点が住居址であると断定出来ないとしても、当時の地表面がこのあたりであつたと考へて大過あるまい。前述の如く此の附近の土層は深く、極めて凝集力が強い緻密な黒色酸性腐殖土から成つているが、そのことは此の地に生育した植物の遺体が長年月の間低温多湿と云う条件の下でしかも極めて静かな状態で次から次へと集積されて行つた事を物語つてゐる。此の地はかつて水生植物の繁茂した沼澤地帯であつたと想定するのは飛躍し過ぎた考え方であろうか。もしその考え方方が正しいと仮定するならば、弥生文化前期の時代には既に陸化が相当進んでいたに相違なく、其後或る時代（それおそらく律令時代までの間であろう）に宮川の氾濫によつて運ばれた土壤が黒土層を覆つて現在の表土となつたと考えるのが妥当であろう。

では此の様な立地条件が当時土地利用の面から見て如何なる価値と意義を有したであろうか。先づ気象を眺めるならば当地方は内陸的な気象の支配を受けて夏季に於ける最高気温は県南部よりも高く、逆に冬季の気温はいちじるしく低い。その上、冬は早く訪れ温度較差も大であるから、当時の人々が定住するには決して快適であつたとは考えられない。次に農業上の主要作物であつた水稻が本来南方系のものであり、品種の淘汰不充分で栽培技術も未だ幼稚であつたとすれば、収量も不安定であつたとしか思われない。更に酸性腐殖土の湿田は水稻生产力の点から論じて決して上位に属するものではない。唯、作土深く自然灌漑により肥料分の天然供給が潤沢に行われたであろうことが想像され、長期間掠奪的農法が行われたとしても、或る程度の生产力を維持することが可能であつたと考えられる。それにしても当時は採集経済の段階を完全に脱却するに至つていなかつたに迷いない。だが未だ農具が発達せず且つ土木工事が集団の力で行い得る様な社会的、政治的体制の整わない当時にあつては此の様な地帯は南部地方のいわゆる Back marshに次いで価値の高い地帯であつたことがうかがわれる所以である。



REPORT UPON ARCHAEOLOGICAL RESEARCH OF TSUYAMA MUSEUM  
OF HISTORY VOL. II

ARCHAEOLOGICAL STUDY ON THE PIT DWELLING SITES OF TSUYAMA  
IN THE PROVINCE OF MIMASAKA

BY  
YOSHIRO KONDO  
YASUHIKO SHIBUYA  
TAKASHI IMAI

TSUYAMA MUSEUM OF HISTORY,  
TSUYAMA, JAPAN

JUNE, 1957

ARCHAEOLOGICAL STUDY ON THE PIT DWELLING SITES OF TSUYAMA  
IN THE PROVINCE OF MIMASAKA

CONTENTS

- Chapter 1. The outline of research.
- A. The situation and the natural feature of the site.
  - B. The discovery of the site.
  - C. The outline of excavation and distribution of the hut sites of pit dwelling.
- Chapter 2. On the hut sites of pit dwelling.
- D. "A," hut of pit dwelling.
  - E. "E," hut of pit dwelling.
  - F. "G," hut of pit dwelling.
  - G. Other huts of pit dwelling.
  - H. Some considerations.
- Chapter 3. Remains.
- I. Iron plancing knife, stone implements and a bead of glass.
  - J. Earthenwares.
  - K. Some considerations.
- Chapter 4. Restoration of the huts of pit dwelling.
- L. The meaning of restoration.
  - M. The present condition of the study on the restoration of the huts of pit dwelling.
  - N. The way to restore the huts of pit dwelling.
  - O. The restoration.
  - P. Importance of the huts of pit dwelling of Tsuyama.
  - Q. Summary.
- Chapter 5. Progress of research and excavation.

## ILLUSTRATIONS

- Fig. 1. Topographical map of Tsuyama District.  
" 2. Topographical map of pit dwelling site and its environs.  
" 3. Physiographic environment of the site (western part).  
" 4. Distribution of the huts of pit dwelling.  
" 5. "A," hut site of pit dwelling.  
" 6. Section of a pit for a centre pillar.  
" 7. Carbonized timbers and other materials as they were unearthed  
in "A," hut.  
" 8. "E," hut site of pit dwelling.  
" 9. "G," hut site of pit dwelling.  
" 10. "K," hut site of pit dwelling.  
" 11. "M," pit and Yayoi-type pottery as unearthed.  
" 12. Section of a pit for a pillar discovered at Tsujibatake of Oku  
Cho, in the province of Bizen.  
" 13. Iron planeing knife.  
" 14. Stone implements and a bead of glass.  
" 15. Stone implements.  
" 16. Yayoi-type potteries I.  
" 17. " II.  
" 18. " III.  
" 19. Pattern of Yayoi-type potteries.  
" 20. Structure of farm houses in Chugoku Province.  
" 21. Sketch of carbonized timbers found in "A," hut site of pit dwelling  
as they were unearthed.  
" 22. "A," hut of pit dwelling restored.  
" 23. Parts of "A," hut of pit dwelling restored.  
" 24. "E," hut of pit dwelling restored.  
" 25. "G," hut of pit dwelling restored.  
" 26. Yayoi-type potteries (1) found at Ichchōden of Yamakita, Tsuyama.  
" 27. Yayoi-type pottery (2) found at Ichchōden of Yamakita, Tsuyama.

## PLATES

- PL. 1. Bird's eye view of pit dwelling site of Tsuyama.  
" 2. A view of natural feature around the site.  
" A view of "A," hut site of pit dwelling.  
" 3. A view of "A," hut site of pit dwelling.  
" 4. Carbonized timbers and other materials of "A," hut site as  
they were unearthed. (I).  
" 5. ditto (II) and a section of a pit for a centre pillar.  
" 6. ditto (III).  
" 7. ditto (IV).  
" 8. Carbonized thatch and a planeing knife as they were unearthed.  
" 9. A view of "E," hut site of pit dwelling and a hollow at its centre.  
" 10. A view of "G," hut site of pit dwelling.  
" 11. ditto.  
" 12. Stone implements.  
" 13. Yayoi-type pottery and a planeing knife.  
" 14. Fragments of Yayoi-type potteries (1).  
" 15. ditto.  
" 16. Haniwa house found in Yotsuzuka 13th tomb, Yatsuka Mura, Maniwa  
district, in the province of Mimasaka.  
" 17. "A," hut of pit dwelling restored.  
" 18. A view of pit dwelling site of Tsuyama restored.  
" 19. Restoration works of "A," hut of pit dwelling.  
" 20. Views of excavation.

1957年3月30日印刷

1957年3月30日發行

著者代表 近 輝 義 郎

發行者 額 田 道 治 郎

發行所 津 山 市 津 山 鄉 土 館  
津山市南新屋25番地

印 刷 所 津山朝日新聞社印刷部  
津山市山町18番地

印 刷 者 福 田 卓 也